



ロイヤル・バレエのアコスタ版『ドン・キホーテ』での、マリアネラ・ヌニェスとカルロス・アコスタ
Photo: Emma Kauldhar by kind permission of the Royal Opera House

ロイヤル・バレエの新版 『ドン・キホーテ』

カルロス・アコスタ版の初演の様子を、デボラ・ワイス
がお伝えします。

ロイヤル・バレエはこと『ドン・キホーテ』に関しては運に恵まれず、近いところでも二つの版が新制作からほどなくしてお蔵入りになっている。物語が軽く、プティパの他の古典作品に比べて重みに欠けるところが難しいのだ。ドラマに現実味がなく、観客が物足りなさを覚えながら劇場を後にすることもままあるが、カルロス・アコスタが彼自身の初となるロイヤル・バレエのための全幕作品で成功を収めたのは、まさにその点だった。最後まで破綻がなく、演技は新鮮で解釈にも筋が通っており、美術(ティム・ハットリー)も豪華なら照明(ヒュー・ヴァンストーン)も美しい。アコスタは、これまでこのバレエの表面を覆っていた不要な装飾を取り去り、より正確に物語を紡ぎ出したのだ。

幕開きを飾るキホーテの寝室の情景が、まず魅力的だ。彼が鮮明に思い描いているのが何なのかは、ドゥルシネア姫の登場とともに明らかになる。彼のお伴をすることになるサンチョ・パンサがすかさず、ベッドの支柱を取り外してキホーテに手渡すと、場面は一気に第一幕の市中の賑わいへと移る。ハットリーの装置は街の半分をロイヤル・オペラハウスの舞台上に載せたかのような光景を現出させるが、やや煩雑で冒険し過ぎの点がなくもない。そして踊りがいったん始めると、後は一気呵成だ。ベネット・ガートサイドのガマーシュは戯画的な面を抑え、華美だが嫌みのないキャラクター。平野亮一のエスパーダは能天気な華やかさが素晴らしく、ラウラ・モレーラは生まれながらのメルセデスの風情。それなのに、ヌニェスのキトリとアコスタのバジルが登場したとたん、他には何も目に入らなくなってしまうのだ。遊び心たっぷりに交わすやりとりも微笑ましく、それぞれの役をどこまで

も熱く演じる。キトリが愛するバジルを自分のものにしようとやっきになるだろうことは容易に見てとれるが、それだけでなく、他の男たちに熱っぽく追いかけているのも一目瞭然だ。ヌニェスのソロはどれも技術的に完璧で、出だしに残念なミスはあったものの、一つひとつのステップが比類のない精度と動きのスケールだった。それに比べるとパド・ドゥは、後から思えば回転の数や技の止まり方の洗練度が今一つだったとも思えるが(リハーサルが少々足りなかったのだろう)、二人の間には観客の夢見てやまない化学反応があった。アコスタはバジルを完全に自然体で演じ、すでにダンサーとしてのキャリアの終盤に差し掛かっているにもかかわらず、今なおお手本のような舞台をみせてくれる。個性とカリスマが一体となった彼の圧倒的な魅力は、常に私たちの心を掴んで離さない。

第二幕は、これまで私が観てきたこの幕の中でも最高の上演のひとつ。イツァール・メンデザバルとトーマス・ホホワイトヘッド率いるジブシーの踊りは、ひじょうに密度濃く充実した振付も含んで、これぞ本物という印象。夢の世界に遊ぶキホーテを背景に、フラメンコのギター弾きを交えた一群が焚火の回りに集まる情景には、親密な雰囲気醸し出される。そしてアコスタとヌニェスの踊るしっとりとしたパド・ドゥは、このバレエが本質的にはラブ・ストーリーであることを私たちに思い出させる。森の精ドライアドたちの踊る夢の場面も、一般的な演出よりもとまて見えた。エリザベス・ハロッドのキューピッドはスピーディで目を奪うほど魅力的。卓越した技術を音楽性が支え、別次元の表現になっていた。メリッサ・ハミルトンは森の女王に理想的な身体条件の持ち主だが、役との一体感を欠いていたのはどうか。この難しいソロの勘どころはすべて押さえていたのに、確信をもって踊っているように見えなかった。

第三幕は活気あふれる居酒屋の場面で始まる(ハットリーのデザインした、壁からずらりと下がる肉塊や、長テーブルが絶妙)。キトリとメルセデスはテーブルの上でを競い、エスパーダはここでも得意満面で魅力をアピールし、我こそはという魅惑の踊りがひしめく。続く結婚式のグラン・パド・ドゥは、ガラやコンクールでお馴染みすぎるほどお馴染みのナンバーだが、こうして全幕の流れの中に置かれると、より大きな満足感を与えてくれるものだ。ヌニェスの髪が途中でひと房ほどけたが、まるでそれ自体が意のままに動いているかのようで魅力を添えた。しかも彼女自身は動じることなく、まれに見る完璧な踊りで通したことで、さらに評価を上げた。続くヴァリエーションではアコスタも気合い十分(髪の毛はきっちり固めてあった)、ヌニェスは内なる炎を燃え盛らせた。コーダでの小さなミスはあったが、それを除けばじつに盛り上がるフィナーレだった。(訳:長野由紀)